

アンデレ便り

聖ミカエル大聖堂（その1）

聖ミカエル大聖堂聖別50年をお祝いして、9月27日（日）に教区礼拝が執り行われます。礼拝説教者にはUSPG総主事マイケル・ドー主教をお招きし、ミャンマー聖公会スティーブン・オー大主教、大阪教区大西修主教が礼拝に参加されます。

今月は、対談形式で、聖ミカエル大聖堂にまるわるお話をいたします。なお、この対談及び大聖堂聖別50年の歴史はDVD化され、教区に保存されることになっています。

質問者：大聖堂聖別50年をお祝いして、記念式典が9月26日・27日の両日行われますが、今の心境をお伺いしたいのですが。

主教：盛大に大聖堂聖別50年をお祝いすることができましたことを、特に聖ミカエル教会の牧師・信徒、兵庫県地域各教会の皆様へ深く感謝致します。

聖ミカエル大聖堂聖別50年にあたり、何とかして、カンタベリー大主教をお招きしたいと思い、昨年7月に開催されたランバス会議の折にも、カンタベリー大主教に直接要請をし、また、食事で同席した報道官にもそのようをお願いしましたが、わたしの力不足で、それができませんでした。

50年前、その前年に行われたランバス会議で、八代斌助主教はフィッシャー大主教に直談判して、日本聖公会宣教100年のために来日を取り付けており、同時に聖ミカエル大聖堂の聖別だけでなく、松蔭中高の校舎の祝別、そして桃山大学開学式への参加を取り付けました。そればかりではなく、大聖堂聖別を記念してカンタベリー大主教からチャリス・パテンを贈られております。これは大聖堂の財産の一つとなりました。

教区主教とはいっても、八代斌助主教と私とでは、人物が全く違うということでしょう。

質問者：1959年4月、フィッシャー・カンタベリー大主教により聖ミカエル教会が正式に神戸教区大聖堂として聖別されました。日本聖公会のどの教区でも、主教座聖堂と呼びますが、唯一、この聖ミカエル教会だけが、これは自称かもしれませんが、大聖堂と呼ばれる理由はどこにあるのでしょうか。

主教：教区内にある教会の宣教・牧会および教導の權威、つまり主教司牧権の中心的存在として大聖堂が位置づけられるわけですが、そこには当然、大聖堂に付随して、様々な機能、そしてそれに関わる役割が存在しなければなりません。

第一に、教区の礼拝の中心存在、第二に教育を施す場、第三に、教役者・信徒訓練の場としての機能が求められます。加えて、エキュメニカル運動の一翼を担い、他宗教との対話の場、海外教会との協働を促進する場としても、大聖堂は期待されております。

今から133年前の1876年、神戸に上陸したSPG宣教師フォスおよびプランマー両司祭によって、神戸地域の聖公会による宣教活動が開始されましたが、その活動は、単に神戸地域に居住する外国人や日本人のために礼拝を守るだけではなかったのです。日本人に対する教育の重要性を察知したSPGは、2年後の1878年、乾行義塾（けんこうぎじゅく）を創立し、1892年、松蔭女学校が創立されました。その後、外国人子弟のためにイングリッシュ・ミッション・スクールがトーア・ロードに設立されました。加えて、海員宣教のためのセンターとして、ミッション・ツー・シーメン（MtS）が神戸市役所側に置かれました。

このように、港町神戸に相応しく、国際色豊かに、聖公会のキリスト教宣教は、教会や学校、海員宣教の活動などを通して、幅広く展開されてきました。その精神的支柱が聖ミカエル教会であり、この教会こそ、大聖堂として相応しい存在であるとして命名したのだと思います。

質問者：聖ミカエル教会は、終戦直前に爆撃により焼失しました。50年前、どのような動機によって、八代斌助主教は大聖堂建築を決断されたのでしょうか。

主教：敗戦直後から、聖公会の地域社会への貢献はすばらしいものがありました。八代主教は、神戸市の教育委員としても様々な面で戦後復興のために邁進されました。ミッション・スクール再建では、日本各地から教育指導の人材を確保し、その人たちと協力しながら学校経営の再建を図りました。学校関係者のなかから多くの信徒が誕生し、信徒、未信徒を問わず、聖公会関係学校・園・諸団体の母教会として、礼拝や地域活動の中心の場として、大聖堂建築への機運が50年前に高まったと想像されます。

質問者：50年前と今の聖堂の時代状況の違いをどのように想像されますか。

主教：大聖堂は設立当初から、神戸教区の祈りの中心としてその役目を担ってきました。これは、大聖堂では毎朝献げられる聖餐式を神戸地域の司祭が交代で守っていますが、この時、神戸教区の各教会でその日に逝去された信徒を記念して祈りが献げられています。約10年前より、朝と夕の礼拝、つまり定時祈祷（オフィス）が毎日守られるようになり、礼拝を通して教区の過去・未来が今という時に合わされ、時空を超えた、信仰者の霊的一致が実現されているのです。

聖別から10数年間、聖ミカエル大聖堂構内に設けられた神学寮で、寝食を共にした神学生が巣立って行きました。しかし、70年代前半、松蔭大学の神学部が、様々な事情から存続が不可能となりました。その代わりとはとても言えませんが、教役者研修を重要視し、毎年開催される研修会で教役者の再訓練をはかっております。また、神学塾の通信教育を通して、信徒が信仰の研鑽を積み、教会を支える中心的存在として育っていくことを期待しております。

最も顕著なのは、信徒の年齢層です。聖ミカエル教会では、おおよそ月1回の割合で葬送式が行われていますが、50年前の大聖堂では、想像もできなかった現象だと思います。

今日まで教区・教会を支えてこられた多くの信徒が、ここ10年の間、次々に天に召され、色々な面で、その影響が露わになっております。世代の引き継ぎが急務であると思います。